

農業技術情報

令和5年9月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター
 十勝東部支所 015-572-3128
 JA十勝池田町 572-3131
 高島支所 573-2111
 池田町産業振興課 572-3118

作物の生育・作業の遅速(9月15日現在) ()内は平年値 移植てん菜のみ3町平年値の平均

作物名	遅速日数	生育状況		農作業状況
大豆	+10	茎長 84.9 (73.1)cm 葉数 10.4 (9.7)枚	着莢数 莢/m ² 535.0(549.0)	
小豆	+9	茎長 62.6 (54.8)cm 葉数 12.1 (10.1)枚	着莢数 莢/m ² 330.0(279.5)	
菜豆(金時)	+12	茎長 57.3 (47.6)cm 葉数 4.1 (4.1)枚	着莢数 莢/m ² 192.9(125.8)	収穫期 8/25(9/14) 収穫終 9/8(9/23)
菜豆(手亡)	+12	茎長 55.5 (52.5)cm 葉数 7.6 (7.4)枚	着莢数 莢/m ² 320.0(201.4)	収穫始 8/26(9/11)
てん菜(移植)	-	根周 38.9(38.4)cm		
てん菜(直播)	-2	根周 32.3(33.3)cm		
牧草	+1	草丈 87.6 (87.1)cm		収穫期 9/1 (9/8)
サイレージ用 とうもろこし	+16	稈長 290.0(284.5)cm	糊熟期 8/22(9/5) 黄熟期 9/1(9/17)	収穫始 8/31 (9/16)

畑作

1 秋まき小麦

1) は種と施肥量

①は種時期

越冬前の葉数は5葉を目標に、4～6葉が確保できる時期が「は種時期」です。越冬前に適正な生育量を確保するため、適期は種を心がけてください。

②は種量

適期は種で140～180粒/m²とし、は種時期の早晩により、は種粒数を増減します。本年の種子は千粒重が重いので、設定に注意してください。

表1 は種時期別のは種量例（池田アメダス過去10年平均気温から積算気温を算出）

は種時期		早期	適期	晩期
		9/16～20	9/21～25	9/26～9/29
は種粒数(粒/m ²)		110～140	140～180	～255
は種量 (kg/10a)	士幌産 千粒重42.9g	5.2～6.7	6.7～8.6	～12.2
	足寄産 千粒重41.7g	5.0～6.5	6.5～8.3	～11.8
	清水産 千粒重39.5g	4.8～6.1	6.1～7.9	～11.2
	更別産 千粒重38.5g	4.7～5.9	5.9～7.7	～10.9

※は種量例は、発芽率90%として算出しています。

千粒重が違う場合は、9月1日付けの技術情報の計算法を参照してください。

また、出芽率が低い場合は1割程度増しましょう。

③は種深度

は種が深すぎると二段根、出芽ムラで初期生育が劣ります。均一な出芽と良好な初期生育を確保するために

a 砕土を細かくしすぎない

b は種前に鎮圧する等の処理を行い、は種深度は2～3cmとする。

浅まきの場合、出芽は早くなりますが根張りが悪くなり、その後の生育に影響してきます。また、深まきした場合は出芽が遅れ、越冬前の生育量が足りずに雪腐病発症の危険があるため、適正なは種深度を守りましょう。

④施肥量

リン酸、カリ、苦土は全量基肥として施用しましょう。窒素は越冬前に小麦が吸収する量は4kg/10a程度です。

過剰な窒素施用はコストが無駄になるほか、越冬後の茎数コントロールが困難になります。また、土壌凍結が浅い年では下層に流亡して地下水・河川汚染の原因となりますので、適正な施肥を行いましょう。

表2 は種時の施肥量 (kg/10a) (北海道施肥ガイド2020より)

土壌型	窒素	リン酸	カリ	苦土
低地土	4	12	9	3
火山性土	4	15	10	4
台地土	4	14	9	4
泥炭土	4	14	10	4

【基肥施肥例】
「BB850」×50kg/10aの場合
窒素-リン酸-カリ-苦土=
4-12.5-5-2.5 kg/10a

⑤雑草対策

雑草が小麦に与える害としては「養水分の収奪」「病虫害繁殖の助長」などがあり、結果的に収量、品質の低下に繋がります。

除草剤を適正に使用し、雑草対策を行ってください。

表3 秋まき小麦は種後除草剤例

薬剤名	処理方法	使用時期	薬量 ml/10a	使用回数
ガルシア フロアブル ※1,2	全面土壌散布	は種後～出芽前 (雑草発生前)	150～250	1回以内
	雑草茎葉散布 又は全面土壌散布	小麦出芽直前～小麦3葉期 (雑草発生前～発生始期)	100～200	
ガレス乳剤 ※1,2	全面土壌散布 (雑草発生前)	は種後～出芽前	200～250	1回以内
		小麦出芽後～出芽揃期	150～250	
	土壌兼雑草茎葉散布	麦の1～3葉期 (雑草発生前～発生始期)	100～150	

※1 イヌカミツレが多発するほ場では、使用基準の範囲内において高薬量で使用する。

※2 ガレス乳剤・ガルシアフロアブルは同一成分のジフルフェニカンを含んでおり、いずれか1回のみでの使用とする。

<緑肥用エンバクの「いもち病」発生について>

8月下旬頃より、緑肥用エンバクの葉に褐色の病斑が発生し、一部では枯れ上がる症状が散見されています。

この症状は、他の総合振興局でも同様の症状が発生しており、「いもち病」と確認されています。

現在、判っていることは以下の通りです。

- ・エンバクに感染する菌は、小麦には感染しない。
- ・いもち病は、高温・多湿で発生するので、本年の気象は発生に適する条件だったと考えられる。種子伝染は低いと考えられ、外から飛び込みの可能性が高い。
- ・過去にも発生例があり、道内では平成25年に新発生病害として報告されている。

2 豆類

豆類は収穫作業のタイミングが遅れないよう注意しましょう。

①小豆の収穫

収穫適期の目安は「熟莢率」で判断し、未熟粒、過熟粒にならないよう適期収穫に努めましょう。

表4 小豆の収穫適期の目安 (H14・H16 中央農試 H9 十勝農試)

区分	収穫時期の目安	収穫早限の目安
ピックアップ収穫		熟莢率80%、子実水分25%程度
ダイレクト収穫	完熟期（熟莢率100%、子実水分16～18%）から2週間以内	①汎用コンバイン（4条） 熟莢率90%、子実水分25%程度 ②豆用コンバイン（2条） 熟莢率80%、子実水分25%程度

3 てんさい

8月まで生育は順調に推移してきましたが、現在は根部の肥大が鈍化し平年並です。

①褐斑病

褐斑病が蔓延しています。

最終防除をまだ実施していない場合は、防除を行ってください。

②シロオビノメイガ

各地で大量に発生していると思われます。

発生量が多い場合は、IGRの殺虫剤を散布してください。

表5 シロオビノメイガ防除例

農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
マッチ乳剤	3,000	14日	2回
カスケード乳剤	4,000	7日	4回

③床土の準備

来年用の床土を準備する際には病気の恐れのない土を用意し、pH測定後、6.0～6.5になるよう酸度を矯正しましょう。

ほのぼの情報や農作物防除基準を参考に適正防除に努めてください。

野 菜

にんにく

(1) 植え付け前の種子消毒

チューリップサビダニ、イモグサレセンチュウ、黒腐菌核病対策として必要に応じた種子消毒を実施してください。

表1 種子消毒薬剤例

時期	薬剤名	対象病虫害	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
種子消毒	ガードホープ液剤	チューリップサビダニ	500	植付前	1回以内 (種子消毒)
	ベンレートT水和剤 20(種球湿粉衣)	黒腐菌核病	種球重量の0.5~1%	植付前	1回以内
イモグサレセンチュウ		種球重量の1%			

○種子消毒例

ガードホープ液剤(500倍)30分浸漬

↓陰干風乾

ベンレートT水和剤20(種子重量の1%)湿粉衣

↓日陰干し(1~2日)

植え付け

(2) pH 矯正

pH6.5を目標に矯正してください。pH5.5以下では茎葉伸張、球肥大が抑制されます。

(3) イモグサレセンチュウの防除

必要に応じて、殺センチュウ剤の土壌混和を実施してください。

表2 植え付け前防除薬剤例

時期	薬剤名	対象病害名	使用時期	薬量	使用回数	備考
植付前	ビーラム粒剤	イモグサレセンチュウ	植付前	20kg/10a	1回以内	全面土壌混和

多忙な農繁期における農作業事故防止に努めましょう!

ばれいしょや豆類の収穫と小麦のは種作業が重なり、心身の疲労が心配されます。一層の事故防止に努めましょう。

- 1 トラクタ発進・PTO始動時は、クラクションなどを鳴らし周囲に合図する。
- 2 機械の調整・整備時(つまり物除去等)は必ずエンジンを止める。
- 3 機械の飛び降り・飛び乗りをしない。
- 4 作業機を上げ点検する時やつまり物を除去する時は、作業機の下降を防止するため「固定脚」や「かませ木」を用い下降防止に努めましょう。
- 5 夕方や夜間に公道を走行する時は、車幅灯を取り付ける。